

TS（トータル・サティスファクション）を目指して②⑤

「追い詰めない」という技術

校長室担当

正論を重ね、人を追い詰めることを最近では「ロジハラ」と呼ぶのだそうです。人を正論で追い詰めている時には、その人は自分が絶対に正しいと思っているため、自分が相手を追い詰めていることに気づきません。もしかしたら、前回お伝えしたとおり、何らかの「心のストレス」解消のためや、「シャーデンフロイデ」という快感を得るために追い詰めている可能性もありますから、普段から気を付ける必要があります。

正論で相手を追い詰めるということは力でねじ伏せることと同じで、特に相手が子どもだったりすると、大人にはこれがたやすくできてしまいますし、ルール違反やマナー違反で相手を追い詰める時も、根拠にできるものがあるので、相手が大人であってもこれが必ずできてしまいます。但し、度を超すと相手は逃げ場を失い、感情を爆発させてしまう結果となります。相手の感情が先走っている時には、理屈は通らなくなります。それだけならまだいい方で、最悪の場合には、関係のない他者を傷つけるという行動へ、追い詰められた相手を走らせてしまう可能性があります。もし関係のない人を巻き込むといった事態を招いたとしたら、これは注意した側にも相当な罪悪感が残る結果となり、そこまで追い詰める必要があったのかを逆に問われることにもなりかねません。確かにこういう「逆ギレ」という状況を生み出す原因は、注意された側にあることは明らかですが、人間は感情に支配されやすい動物ですから、理屈どおりにはいかないことが多いということも注意する側は理解する必要があります。

間違ったことをしている人を注意するという時に大切なことは、感情的な逃げ道を残しておいてあげるということです。頭ごなしに押しさえつけるのではなく、一定の理解を示しながら、まずは相手の言い分を傾聴するところも必要になります。否定をせず、まずは思いをしっかりと受け止めていくことを重ねることで、感情のほとぼしりは消えていきます。時間がかかる場合もあります。しかし、そこを丁寧に対応することが本人の納得しやすい環境を整えていくこととなります。これは甘やかすということではありません。

前回のお話の中で、長い行列に割り込んだ人を私が注意したというお話をしました。間違っただけを注意する人、相手に気を遣わなければならないのかと自分でも思ったこともあります。しかし、どのような場面でも相手が納得できるように注意することができれば、この学校が目指す「トータル・サティスファクションの実現」はかなり近づいてくると信じています。相手が納得さえしてくれれば、もう注意すること自体が必要なくなるのですから。教育という現場に立つ私たちにとっては、とても大切な技術ではないでしょうか。決して追い詰めるという方法ではなく、相手の状況を理解した上で、相手が納得できるように、相手に適切に伝え、相手を「追い詰めない」ことを教師、いや人間の技術として身に付けたいですね。学校という現場で私たちが見せる姿は、人間として成長する子どもたちの人生に大きな影響を与えています。いい学校を創りましょう、一緒に。(令和4年9月5日)

本校教職員として目指す方向性（確認）

※令和3年4月1日にお願ひしたこと

- 1 トータル・サティスファクションの実現
- 2 学びに向かう力をもつモデルを率先垂範
- 3 対話とパートナーシップに基づく行動
- 4 全教職員で全校の児童生徒を見守るチームの実現
- 5 「今さえ、ここさえ、自分さえよければいい」の考えを戒める